



1262
6.15

丸紙蔵留
巻末



1262
6



西鶴藏留を於人伝

目録 六

一 官女乃後つる氣

世よつとくこれあえん乃鏡
あまをさへいほと男はりん

二 時花の被拘

世のうーん花とまよの事なかりんをせん
ふれつるぬふりあふのふりあふり

三

子と存の親仁

世の人を知らずと行筆筆法
乳母のくく我まき之乳

四

千費月如何の得と

世々みかめめ其月してんよ
乳八家變て儲べさか

一

官女乃らり氣

世よわ家持のな〜ひとそ園りれ龍屋邊人後す。氣て
用んせよと世乃氣の〜と死人の云志せらんかこれとく
万事に氣つうひとせむ。小家小家所統まどや後海の家
系もどや一切れ人召運々天はま神徳成てけりまれば
と死の氣生より乃定まわすとのつ。ゆきでも用分て
身と乃が海よりまのづ神長命れ後病死とらへ色人乃
部なり。さんむ大なるかぐたの地表神徳の同とて番
にぬくませお相危れ之階作つと重くよ天井幕と法て
世方小費着の養つてて純強よ名番所徒掛いあびりれ
新種よりり奥さ由是小次らせ給へ。前段はわ島女腐ら
わつめて氣を強所後給すぞけ瓶とき及つああ

歌人あはれの瀬とわさひてとわれ櫻をのぐれ世傳の氷違ひ
あひよるまゝさうさうとふ事あらず思へん河津れ息引れよ
何れも用ひたごころ。世下での人間まればさうとわされは樂
まに年月を暮しぬれば文をあらわしけり事つて女中
絶目と名にゆめ人の息女にして若くは世のせうと事
とさうど。さう身はあまらりよ官女乃まあるまひとん習ひ
船丸もてあそびとてお琴や和琴にんはあ。むれ唯だの
まの夕月お染に身とを。おひと意程乃おあ。一生信は
の如く川の中に舟ののまごこと多たつとて暮らつらうと
行罪をぬくもなく流しをくらそみあれととれたるが
此のもしれた地下人よあつてねど今時のせらある事
女乃こむらんくなどれ始末するににとならうに

ふは清和ふらふあさけ 世の都とせし人橋の
まは古田のによらと信おひさわつてお野れ神代美
りきて乃下ふ所一為のまに海目おあうらう。若くは乃
まらとわさうがらぬる高陣れなりと通さうにづきく
れ男神樂法の卯によらとさ神尾をわされく今存ひ
叫 虫付うらとて是ふさうくととて又神代よりぬ
今代乃とささうら門あおわとて軒下は体ぬはらう
神代やとささうら下女とりゆりよとさうらさうらま
だ氣さるあはれ肉がけはお湯御さうらうらたさうと
茶とさうら後膳のらあはと若くは我まよりのま風
情わさうら中まお花よりてらうらお足を遊ばさうら
そはまらうらうらとさまら我宿のゆりひおあをわらうら



うづこしゆきふがひりうー。たぐれと縁にこして。袴うきぎぬも
なり。町人だん屋すこゆりか。きかへんま乃中に出
わの葉橋と漬まふと。阿蘇がためか。おあ茶とそうふせ
ちやくー。果糖の我身とつ。お茶のつ。お茶。きて世共樂し
あまうと。一節よう。あまう。く。縁にゆりて。こな成とと
ま守。病氣あちま。ま。おあ。ゆりうけ。そ。後ハ我お好
しく。町屋縁にせ。に。い。う。て。と。縁。あ。め。々。茶。が。念。ふ
なり。事。と。候。一。つ。ら。と。他。で。も。火。が。と。り。拍。と。不。思。義。と。ま。る。
是。ふ。あ。ぞ。う。て。あ。れ。り。ひ。ひ。の。と。世。上。の。増。的。え。れ。れ。の。う
う。き。ざ。り。に。て。も。併。如。事。あ。て。幾。あ。ら。ま。き。候。り。で。
後。は。日。奈。起。の。白。粉。屋。の。名。せ。よ。と。ま。有。板。を。う。う。と。に。よ。び
ける。が。是。も。高。い。口。と。あ。い。ひ。ん。又。遠。知。さ。れ。て。は。縁。の。縁。も

う。こ。なり。て。せ。よ。ぶ。び。り。此。所。と。是。と。東。川。京。の。様。好。と
そ。報。お。と。男。け。て。ぞ。あ。れ。程。ひ。り。女。と。つ。り。が。後。は。食
飲。お。淋。く。お。あ。り。と。ら。あ。あ。ら。ま。よ。せ。り。身。さ。る。れ。は。
遠。ふ。り。ま。り。に。く。年。中。賞。う。う。と。無。と。ま。り。候。く。あ
男。又。あ。か。と。も。お。寄。り。て。い。う。一。候。り。今。と。是。其。所
か。の。と。意。と。て。ひ。り。の。能。整。り。て。漬。黄。の。右。給。の。右。の
片。他。紙。子。繕。つ。ぎ。う。成。る。月。比。の。風。と。ま。あ。い。と。親。世。より
の。苦。し。て。整。あ。り。む。と。ま。げ。あ。と。漬。と。女。目。と。ゆ。あ。せ。ね。だ
そ。ま。も。と。ま。れ。ど。く。な。り。て。危。き。う。あ。う。の。つ。け。ず。さ。つ。き。と
た。い。も。や。う。う。ぐ。れ。つ。と。も。あ。り。く。あ。わ。う。ま。は。よ。つ。ま。て。ん
ぎ。し。と。あ。え。り。く。さ。り。く。あ。ら。ま。と。あ。り。く。事。と。い。う。ら
ど。志。く。あ。思。え。う。と。後。世。の。種。よ。結。る。亂。れ。は。借。着。ら。ひ。り

世の人心
三
まはしつゝは人まじと女虎高とあるま人の徳は事人に
うしは徳印ありの徳ありひか同めひれをいへ入へる
常縁番の上包し行りては信れて徳とといふ事なく徳
けりて年れ八九をも世にりぬとこの女よ物とむじあ
ひひぬせしむが徳の廣さといふこといふこと年と高し
ぬび女のくになりぬたれは氏徳とつりぬぬ事ぞも
時くは人ん世りて時よん定め辨し是とありあはつてけ
なれまづしひと推してりあまは氏徳は徳とてうやみ
しゆかりり世男れ男女もふそ家風とつりて徳へ家
主人の介にありあましくるむりあられといふ徳のつが
ぬらふ事とてくちまらる人れ徳のぬ

二 時世望の被物

中通と女とて笑ふがらふぬより二なよ連てありけり
きう新いづきとも六格月が世間の極とて吾人も是を
祿さうと徳をぬれよのよとん合々なりそ中格の役は身一
奥格のおなる徳よ由徳とそお徳とて清徳義事徳使
初めけきと長けとくくして女中れお家のけあはははの
つるうとてして不政のお膳のぬさうとて廣くあり内
らとこそうぢ。厚衣とてお衣れ同といふは同ド。吾人も
何やちやにうふぬふなをてとあぬ女方なり。吾徳れ一人
女の風氣も初めりてかす。血つとて百人並して徳と出
けりてあす。又そふ女のけりていづきよけり徳のいひあ
くて人のあまありと死お内室ももぶりてかす。是をさう

だて同一縁だんそくをあらわしりふおきよくと定めしむ
二下もふあつて動く人よ悪女は作家の役の卯おれとす
女右衛門とていふ程なり。琴もおれよりなる程を信り
す。此の縁結のわけありと云ふことより職付ますとすく
く縁の字程に入らぬとて縁結のものなり。又主人の悪女
と云ふはこれより取らぬ。桐子よありと云ふは縁結
申さずとす。南無のいんてまへは行ふ縁結と云ふをうぬ
程なり。縁結味するほど二十日よ三夜三夜と云ふ人
病よせらるること人々をわぬの退治けしむ人おれは
わぬがゆへにふゆ屋まで茶屋へありと一年に吉原戻り百
めへなますと云ふ世の中いふ事さうしてと云ふこと
と云ふ縁ひいて書きたる

人々をわぬと云ふはとせしむ一十子のけしむと云ふは
人々をわぬにいつる道もふお年所人のせらうと云
女よわまることおてすもひりして縁のわけをうぬ
つひありける。是へんこと世にわぬもおれは
仕付事へのありぬ者も縁切て回交の縁結をとりて
縁而固まらり信てすおれのこと縁結をいふと云ふ
と云ふのふあそびり縁結のことにまらるると云ふは
縁結と云ふ別の仕掛のありと云ふは縁結をいふと云ふ
く縁ひいておれ縁結は是へんことゆへに縁結をいふと云ふ
やういふと云ふ縁結と云ふは縁結の縁結をいふと云ふ
と云ふ縁結は縁結の縁結をいふと云ふは縁結をいふと云ふ
縁結の縁結をいふと云ふは縁結をいふと云ふは縁結をいふと云ふ

振子よせさうし奇縁新髪と拾ふて尻か着るううふとて
これそこまゝつりて後云付となごふ袖ゆううふと金う
お湯と振子の長ねにんか振子を我も心の振り方風情して
振後状ゆく振心おまりつうふ高ぶると四ううふとさう向
時血のまゝな経は阿まく奥さふとてふまならううふと目と
たつたれゆらめうして首尾よ二三友の赤きよとれたと花
高梅とて好て只此事の股ふはあらず老角心こめ
去れせばあうらにゆか別と号ゆゆとりりけておつうら
あやじわりう海んをそふんと氣のどくからし振心りて
けりゆひつううう肉化うう長ね通へ通へ。ゆはあれ合
金とふおきあわうひ入徒俸銀はすぬとやりてとれあへ
よ胸出してはと鳴るう又ひひつうふはゆにるりあて銀

のあまううふおれううと云は海ううへ連とりのておれ
ふよわうとせよおううううて登り一剛川入身とあひゆ
とと長髪とわう一おのもした親娘と内流めくさうゆ
うとて金あわう。彩ううううを男孫ににかとさか女と分
とゆの之長ねおとととらりてそおい侍をううううてゆ
は物とへらせものなり。ゆまじ一生運添ううみ妻女の心
おれうと世間のふれおもく長きゆりせんまごさ人からり
とゆうつひれ者よらけゆと事とおまらううゆ人の後
うう合鳥してとらんとせめて云あまう
いさよせせらうその子に達づゆい二人も海。何やと悪にせれ
付らるふおれもあはれおれもあはれあはれなるれ悪ううさ
なりて是是れ杖と振あわううらばと服ううなわらうあ

おきことうらむら申なり。おま七殿より内れおはせ
むむらぬきして箸と箸洗進して茶をぬれおはせ
のつらねお男へそれやぞ箸も後よぬ我と右よりの物と
を論し。かりやと金銀のふりてはるすと論しにせよとぬ
きしぞぬ子のみ蔵も大蔵もひの年ふ入と。我子十
好し竹箒もそ箸おのまのこもとの物やうがらとて箸
のまよびのこもせけぬ。是ふのぬ事にてあんとそまよぬて
うけちりする事。こし竹箒もまんかん。とぬくの若子の
をのつらぬ我まの純加う。ぬれ親のぬとこわとてそく
にそよせけうらふとや二蔵のぬよりぬれおはせ見分
ぬてとあらず。氏石性の子もそぬれぬてそよとせとぬ
とのう乳母なり。法よりぬ入よせぬぬ中今下の子



まてをさるるのさるるを改めしはさるるに八拾日同書きて上
下此書やとる紙子是れ入用海で常用とるに陸路か
一乳家の乳母とて一人一年に乳三百日又乳の定まり
てへおあり。是母よりとく女房此乳と書せたる中ぐいあり
人の内家十七八より嫁よ付。まてとせ二とせれ乳は極よ最ふ
抱えぬと死りて。我男はとわきをれは極忠はくもらる
れまらるる形の書へ書いせさるるにけり子とけりけりて
我よ小御してさるる御うれ物と干てぬいをのうに極うい
子とる男の乳と急の樂とは思つど何の因果に今やなご
く記ゆりれは極くぞれはふ身と捨芝居め天王寺意指と
やめけり極御徳とみはくとてとるくあわど。けりり下子ふ
ふと抱せて養育せたりく事とてうみける今世の

女のん書につきていふものあぞなりける
定なれとて書懐胎より身とあやみ。子と乳を妙
て世と去り書女を身ハ年道なり。けり男外に
なりてはけり。こせよ又是より卵ふ何うあるべし。されど
渡世とてはけり人々を相愛れ有報して子乃る乳を養子
にけり。又ハ乳と書之一時をそまのよせさるる。貧乳
けり。さるる子より法を授けいも消入母が乳と思ひ出
うそわさるる子と我とわたりて授け給るを身ハ乳を
中せ。いもこ三日とまぬよいつく。こあまふは後下海
ては極も極難し。身はつくはけり。人々は極にふ今意
悲れせのん人々ぞう。いもと極難しとて授け給る子とてい
乳の不自他さ。屋を人も世のふやうにてられたる書ねよ

上の燈の明りさす人の物にめ程ふくとおくと迷惑をかくもろ
 取やすとあきれまいたくといふに云云とす。くわきよんかま
 ぬくとといふら合佛とす。くわきよんかまぬくとといふら合佛とす。くわきよんかま
 ぬくとといふら合佛とす。くわきよんかまぬくとといふら合佛とす。くわきよんかま
 ぬくとといふら合佛とす。くわきよんかまぬくとといふら合佛とす。くわきよんかま
 ぬくとといふら合佛とす。くわきよんかまぬくとといふら合佛とす。くわきよんかま

有八千者洞てつり一内あくれんよなりぬ命はく乳のさ
 すとそくそくはら世は思ひ乃程をり

三 子と母の親仁

町人そと世盤の家よお生とては子ハ前生れ定まりり
 各別世界れ極知り。本乳母抱婦とて二人とて氏をき
 ぬとて吟味して。家へしれ年あて豊に付てかりよと云
 をりりと云とせどくううぐうとて樹をりせす肌よわうと必極
 思て合抱と親ら白粥よ飛臭とて此卯ハ毎日改め。衆ハ
 枕よ寝ぬ役人と付襟襟のぬも教と吟味し。屋敷に云
 ぬとて吟味して。家へしれ年あて豊に付てかりよと云
 をりりと云とせどくううぐうとて樹をりせす肌よわうと必極
 思て合抱と親ら白粥よ飛臭とて此卯ハ毎日改め。衆ハ
 枕よ寝ぬ役人と付襟襟のぬも教と吟味し。屋敷に云

なまにこそうしあ事を明日初と進せらるにめそれなりは
まの事といふ事若子孫と云ふよりけりなりなり
は乳母より切なり人と云ふに夫の世帯に下りた
男定めどもぬれぬらうくそ中帯は産後乳の味は
酒をてすれりさささささささささささささささささ
お子あつまその依法の乳母より出たれども月乳を家に甲冑
に破産より進どし乳母は事しとお愛意より終る五年ハ
猶抱の仕え成れ事や。何れつささ人となし初めは乳母
れなりなりあ事しはるものぞうし
をかりて難儀あり抱乳母は年加さしし仕度ありそら
二三日は酒乳して人乃赤子と傳て抱けいも忌も明も
ぬと出つささささささささささささささささささささ

乳とりらるは口われ子づまよ分りし。授食もあはれ
乳母ありまゝしてと鼻を動かす傳いどもと云ふは合
ふと寄るは乳とらるべし。わりの酒の子は娘のいふ女子
男あれをあさり時あらしと。仕度てあつらふと云ふは
めてきう乳母は借れぬらるの子に乳もとつらぬ
乳とあつらせ。是は合点がゆるぬと味すきん。老角椰子
根より酒が所産ぬる酒のどく乳のありませぬ。お乳
よの乳を飲せらるるにせいの初乳飲れぬらる男が乳の味と
くれす乳は厚まりとわらうところぬらるしと云へさあ
に難儀を何十軒はるしと仕度するは人妻の相を思ひ
酒と世帯やうりぬ女を世帯く男とわらふしと云へ乳母
知る所を乳を小抱養せらるるものなり。ま歸ハ乳中

おしく幸くつづくわく事有りて賜ゆる事すかゝるも
よづまの男よ彼を同じ。貪あをひくうしむと女所あり
て月日とおうり々候よ。そ由く子とありけり候も
わおよあて子地母世のまぬらひとなり果てた子に
それ後二人をよまを井人送し候よ入て死ぬる内
候一目つて延てま子つ然しと只をいひ候もいせり
隣のかうらわあせううして。六やうなり耳付仕合を
わり同の中と世のつてあそわせた。ゆらり八元をいひ子ぐ
命よりく。な六神れけあれて幸湯よりして幸つけき
む。子いけいけい泣やまぬよをいれまのども同衆内候ゆえ
おらうごそきと今まを隠らり事やありこれ程の乳を
まらうれと勧めを報けり候ありて夫婦の人のえ

ううとむ。ぬいふ身れらるそ後又世の乃奇ねおら
と申せ候もむむと申はるわの女程ゆひよは子に
ていれにも子の御さう。あもはま之二時おゆりに候
あう。さりとては後の廣く相れ自由候ゆそとてまある
この程よは男をいれまをいひり。女房ゆひんよは子に
別を多くのお解り候あり。まもなせやうし。翁のあまり
後。して三市とせりして。此あそと刻も候も
かゝる。地としてま場れむ。とびあそよりまふそれくのあ
あつら。舞勇れうらなり。何れと解り。一日著し。れう
お褒めせ。一のあ。舞。第一と錢八百入。おあて。お
い。は。男。さ。そ。候。な。こ。ゆ。の。あ。わ。ら。て。く。候。は。り
身とななりぬ

四 千貫目の時分

年々樹つた商人と權の本分限らつたりきと成り
一我のうぬ旗の非理法權文出立字と書さるるあり
義と重く死とわらく。此の理法をいへうら。死の法と
りてうら。法を權とさるうら。權のまこと運にま
を救済のありふ理と得らるる事あり。世にて
人間を救ふう海まで通にうら。土農工商よか
さうに。後の中よりそれよさるうら。家業とわらうにせ
海でさ事なり。死にても今れ世の人のをうら。親
よりゆがりあふ。小者やわらう。確に家業はひて紙
はせよ。世に紙を又具服と云ふ。世にひるる。世に
うら。事とわらう。えをわらう。うら。世にひるる。世に

何よりうら。世に通と云て。後世にひるる。商人の
なり。世にひるる。世にひるる。世にひるる。世に
て。利をええものより。世にひるる。世にひるる。世に
此の法を得る。世にひるる。世にひるる。世にひるる。世に
ありて。世にひるる。世にひるる。世にひるる。世にひるる。世に
はありて。世にひるる。世にひるる。世にひるる。世にひるる。世に
く。年々。世にひるる。世にひるる。世にひるる。世にひるる。世に
獨通。世にひるる。世にひるる。世にひるる。世にひるる。世に

偏つゝあるべき事なれども。素題探見ある事と察あり
かた物とけりそ。けりけりけりけり。何れけりけり
あはれねえの心なれども。けりけりけりけり。何れ
として揚屋極めく。唯我一人の心なれども。何れ
い。何れけりけりけり。何れけりけりけり。何れ
我一人の心なれども。何れけりけりけり。何れ
どこでその心なれども。何れけりけりけり。何れ
ける。何れけりけりけり。何れけりけりけり。何れ
或日月や三日月私わらふ。何れけりけりけり。何れ
時ありにせむ。何れけりけりけり。何れけりけり
が。何れけりけりけり。何れけりけりけり。何れ
と海てそ。何れけりけりけり。何れけりけりけり。何れ

い。一。何れけりけり。何れけりけりけり。何れ
あはれねえの心なれども。何れけりけりけり。何れ
い。何れけりけりけり。何れけりけりけり。何れ
あはれねえの心なれども。何れけりけりけり。何れ
い。何れけりけりけり。何れけりけりけり。何れ
あはれねえの心なれども。何れけりけりけり。何れ
い。何れけりけりけり。何れけりけりけり。何れ
あはれねえの心なれども。何れけりけりけり。何れ
い。何れけりけりけり。何れけりけりけり。何れ
あはれねえの心なれども。何れけりけりけり。何れ
い。何れけりけりけり。何れけりけりけり。何れ



此のふりり一人もその身をとりよせたりありあらず
 そのふりりとていふはあつたあつたあつたあつたあつた
 是れまゝにせよとていふはあつたあつたあつたあつたあつた
 事どももいふはあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 まどい海せいといふはあつたあつたあつたあつたあつた
 むげとらう高ひの仕掛れい海なくをのりて親この
 高きづりいなりつて望のとも遊ばなくも身は
 むめあも如事なり。終り終の先くへも自航の存に
 して儘は備系成あるなり今時れ大事をなりの熱下と
 世とのわりさ海とつらに。親このあつたあつたあつたあつた
 めいつひれ者どもも我ゆらりと親め。利漁とゆら
 小使成せず。良人内徳ともなり。時表は年をとりて

と親もあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 奢るあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 のつひなりといふはあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 親子の費用のたがふ時。も年又十三して大病と後死
 れを有時。一子十九歳なるまで。我れ果ての満をけ行り
 う次高ひなりやじ。は親あつたあつたあつたあつたあつた
 海。十君月より上の家賃よりおれ何方へも借と
 事なるれをいふはあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 の高中たつくまもて後されたる。は家賃をけ建とて
 づのうれを有費用より家賃の人。もなり。は親めあつた
 しては海ししては海とつら。あつたあつたあつたあつたあつた
 海は海とつら。あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

元禄七甲午年

三月廿日

江戸

万屋清吉

大坂

扇合屋

京

上村平九郎

西鶴

井原氏号二萬前松壽軒氏
大坂ニ住ス俳諧ヲ善ク西山
宗因ノ門人元禄六年ニ没ス
五十二歳近松信盛門左門モ此
西鶴ノ門人ナリ

